九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『風葉和歌集』所収散逸物語に見える「后妃の密通」

宮﨑, 裕子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/8957

出版情報：文獻探究. 43, pp.9-26, 2005-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『風葉和歌集』所収散逸物語に見える「后妃の密通」

宮崎裕子

一

中世王朝物語においても男女の密やかな逢瀬は好まれた題材であったらしく、密通をめぐる様々な悲喜劇が多くの作品に描かれており、それらの中には、『源氏物語』の藤壺と光源氏の如き、后妃との密通―「后妃の密通」―もいくつか含まれている。現存する中世王朝物語に見える「后妃の密通」には、当事者達の深い苦悩、密通によって誕生した不義の子達の懊悩といった悲劇的要素の濃いものが多いのだが、『我身にたどる姫君』や『風に紅葉』になると、「帝の御妻をあやまつ」重大事であるはずの后妃との密通が、何の罪悪感も無く行われるようにもなってくる。こうした変化を見るとき、散逸してしまった中古・中世の王朝物語で「后妃の密通」をどのように扱っていたのかが問題となる。

『風葉和歌集』には、散逸した物語に描かれていた密やかな恋の片鱗が数多く留められており、それらの中には、「后妃の密通」とおぼしき物も見受けられる。そこで、『風葉和歌集』に収録された歌とその詞書をもとに、散逸物語で扱われた「后妃の密通」について、その様相を探ってみた。

なお、資料の取捨選択については、后妃とその配偶者ではない男性との歌のやり取りなどが存在しても両者の間柄を判別しがたいもの（『末葉の露』『波のしめゆふ』）は対象外とし、両者の恋が配偶者死去後に生じた話と推定されるもの（『嘆き絶えせぬ』）も除いている。男女の仲が破綻した、もしくは、何らかの理由で疎遠になった後に女性が入内する「しのびね型」の可能性があるものは、「后妃の密通」に相当するのか判じ難いが、対象に加えた。女性の立場が尚侍である場合は、純粋に内侍司の長を務める女官であったり、『源氏物語』の玉鬘のように夫がいる例もあるので、本稿では尚侍を后妃としては位置付けないことにした。また、藤壺中宮と権大納言との密通が想定される散逸古本『海人の刈藻』は、現存する改作本によってその内容を推し量ることができるので、ここには取り上げない。

「后妃の密通」ではないかと推測される事例は、「しのびね型」とも考えられるものも含めて、次表の十五作品十六例であ

り、以下、それらの事例を個々に検証する（注１）。

物語名	后妃	密通相手	根拠となる歌・詞書
1逢ふにかふる	梅壺女御	三位中将	785
2うき波	皇后宮	権中納言	911・912
3うつせみ知らぬ	中宮	宰相中将	1398・1399
4小車	麗景殿女御	不明	380
5親子の中	中宮	内大臣	980
6女すすみ	登花殿女御	左大将	478・816
	内大臣の女御	左大将	1354
7かやが下折れ	宣耀殿女御	関白	437・438
8玉藻に遊ぶ権大納言	東宮の母女御	不明	1022
9たゆみなき	藤壺女御	不明	364
10千々に砕くる	按察の御息所	左大臣	837・838
11萩に宿借る	院の女御	大将	887・888
12袋かけ	女御	不明	795
13御垣が原	皇后宮	宮の大将	659・1097
14みかはに咲ける	承香殿女御	権中納言	932(物272)
15闇のうつつ	大納言の更衣	左大将	657・694

＊表中の「(物)」は、『物語二百番歌合』所収歌であることを示す。

二

1『逢ふにかふる』〈三首／『風葉和歌集』所収歌数。以下同〉

▼巻第一春上38

女に梅の花を折りて見せ侍るとて　逢ふにかふる三位中将

紅に匂はざりせば梅の花深き心をよそへましやは

▼巻第四秋上268

逢ふにかふる梅壺の女御

物思ふ袖の涙にうち添へていたくな置きそ夜半の白露

▼巻第十一恋一785

梅壺の女御に思ふ心のほど言ひ知らせ侍るとて　逢ふにかふる三位中将

忍び余り色に出でぬる袂かな人知れずこそしぼりわびしに

小木喬氏は、『逢ふにかふる』という題号と785番歌の上の句とが、それぞれ、「帝の御妻をあやまつ」物語である『伊勢物語』六十五段の昔男が詠んだ

思ふにはしのぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ　（新編日本古典文学全集一六七頁）

↓『新古今和歌集』巻第十三恋歌四1151　業平

という歌の下の句と上の句とに一致するので、『逢ふにかふる』の典拠は『伊勢物語』六十五段であろうと指摘された（『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』笠間書院、一九七三年）。

また、38番歌は、「女」に見せたのが梅の花であることから、詞書の「女」は梅壺女御と同一人物かとされている（『中

世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版、二〇〇二年）。

前掲の三首だけでは、梅壺女御が三位中将をどう思っていたのかも、女御に「思ふ心のほど言ひ知らせ」た中将がその思いを遂げられたのかどうかも、不明。２６８番歌によれば女御には物思いの種があったようで、その原因は三位中将との関係にあるのかもしれないが、これも真相は不詳。

２『うき波』〈十七首〉

▼巻第十二恋二９１１・９１２

忍びたる所より出でて、あしたに遣はしける

うき波の権中納言

人はいさうつつがほにや覚めぬらんまだ明けぬ夜の夢の通ひ路

御返し　皇后宮

身を換ふるこの世のほかと思ふまに今こそたどれ夢の通ひ路

この後朝のやり取りが交わされた時期は、

九一一歌の「うつつ」「夢」の語の取り合わせが、『伊勢物語』六九段の「夢かうつつか」を想起させるし、九一二歌の「身をかふる」は、『伊勢物語』六五段の「逢ふにしかへば」などを想起させ、また両歌に共通する「夢の通ひ路」は、『伊勢物語』五段の「人知れぬ我が通ひ路」を想起させる。これらの表現は、例えば『源氏物語』若紫巻での光源氏と藤壺との逢瀬の場面を初めとして、いわゆる帝の妻を犯す物語に引用される、類型的な表現であった。

（『中世王朝物語・御伽草子事典』五二三頁）

ということと、９１１の詞書に「忍びたる所」とあり、権中納言が皇后宮のもとへ通うのに人目を忍ぶ必要があったということから、この時点で皇后宮はすでに入内していたものと考えられる。

権中納言はこの物語の男主人公らしく、皇后宮とだけでなく、藤中納言女・帥の宮の娘とも恋仲で、また、相手の名は記されていないが、次のようなシチュエーションでの詠歌もある。

逢ひがたく侍りける女に、からうじて行き逢ひたりけるあしたに遣はしける　うき波の権中納言

逢ふ瀬にもなほよどまねば涙川いかがはすべき袖のしがらみ

（巻第十二恋二９０７）

いと忍びたる女のもとより帰り侍りける道に、霧のいたく立ちこめたりけるに　うき波の権中納言

今朝のまの川瀬の霧の隔てだに立ち別るるは悲しきものを

（巻第十五恋五１１２５）

「逢ひがたく侍りける女」と「いと忍びたる女」も皇后宮を指すのかも知れない（『中世王朝物語・御伽草子事典』）が、権中

納言にとっては帥の宮の娘も「忍びて物申しける女」であり、彼女と他の男性との結婚が決まりそうだと聞いて次の歌を贈っている。

忍びて物申しける女の、こと人に定まりぬべく聞き侍りければ　　うき波の権中納言

この世にて絶え果てぬとも三瀬川いま一度の逢ふ瀬あらじや　　（巻第十四恋四１０３９）

他の相手と結婚した帥の宮の娘が、それ以降も権中納言との忍び逢いを続け、「逢ひがたく侍りける女」「いと忍びたる女」と称されたとも考えられる。

３『うつせみ知らぬ』〈四首〉

▼巻第十八雑三１３９８・１３９９

世を逃れ侍らんとて、中宮に便りあらば見せたてまつれとて、書き置き侍りける　　うつせみ知らぬの宰相中将

君をのみつらきながらもほだしにて今ぞふみみる岩のかけみち

これを御覧じて　　中宮

今はとて入りけむ道の懸路にも心一つや後れざるらん

中宮への文を「便りあらば」見せて欲しいと託しているので、宰相中将と中宮とは容易く連絡をとることのできる近親者ではないのだろう。

ところで、中宮は一時期、行方知れずになっていたことがある。

枯れ果てむ後を恨みよ埋れ木も花咲く春のありとこそ聞け

これは、うつせみ知らぬの内大臣の、中宮行方知らぬさまになり給ひ、頭中将も世にかしこまることなど侍りけるころ、清水にこもりて、枯れたらん植木もと経読み侍りけるを聞きて、「花咲かんことを祈りし埋れ木はさてだに朽ちて根さへ枯れめや」と思ひて、いささかまどろみて侍りけるに、この寺の師の大徳とおぼしきが申し侍りけるとなん。　　（巻第七釈教４８６）

小木氏の指摘される通り（同氏著前掲書）、中宮の地位にある人物が行方不明になるとは考え難いので、これは入内以前の出来事であり、その一件には宰相中将が関係しているのかもしれない。

内大臣が中宮と頭中将の父親であるとすれば、それ程の貴顕の姫君でありながら失踪してしまう中宮は、正妻腹の娘ではない可能性が高いだろう。父と同居しておらず、母方の後見も不十分という境遇にあり、それゆえ、宰相中将が密かに通う隙も生じやすく、更には、中宮自身の失踪という事態に陥ったものか。

ともかく、何らかの事情で内大臣家の姫君は失踪し、父のも

とへ戻った後に入内することとなった。彼女との今生の逢瀬を諦めた宰相中将は、遁世。中宮は、彼を偲びつつ、帝寵を得て后の位にのぼる、という「しのびね型」の物語であろうか。勿論、中宮の入内後に二人が忍び逢っていた可能性も否定できない。

4『小車』〈二首〉

▼巻第六冬３８０

男の絶えにけるころ、時雨を聞き明かして

小車の麗景殿の女御

おとづれの絶えぬ情の時雨にもなどかく袖のぬれまさるらん

この一首だけでは、宣耀殿女御が「男」の訪れが途絶えた後に女御となった「しのびね型」なのか、それとも、「后妃の密通」であったのか、判別できない。

『小車』からはもう一首が『風葉和歌集』に採られており、こちらも麗景殿女御の詠歌である。

かばかりと身の憂きほどを知らざりし秋の夕べも涙なりしを

（巻第四秋上２６７）

詞書がないので、どのような状況で詠まれたのかは不明だが、３８０と同じ「男」に顧みられなくなった我が身を嘆いたものか。

5『親子の中』〈十四首〉

▼巻第十四恋四９８０

内大臣心変りたるさまに見え侍りけるころよませ給ひける

親子の中の中宮

変りゆく人のつらさも分かれぬにいかに知りてか袖のぬるらむ

中宮と内大臣との恋が中宮の入内前なのか後なのかは、判らない。内大臣が心変わりしたように見えて二人の仲は途絶えてしまい、その後、中宮が入内した「しのびね型」かとも考えられるが、真相は不明。

入内後も中宮は愁いに沈むことがあったようで、帝と次のような歌を交わしている。

中宮、里におはしましける比、奉らせ給ひける

親子の中の帝の御歌

ながむとも同じ心にたれか見む思ひぐまなき春の夜の月

御返し

ながむれど心は晴れず春の夜のつきせずものを思ふ身なれば

（巻第一春上４６・４７）

中宮の心が晴れないのは、内大臣との破局に原因があるのかと

も考えられる。一方、中宮の母が、

世を離れむと思ひ立ちけるころ、箏を掻き鳴らして　親子の中の中宮の母

今はとて掻きなす箏の果ての緒に心細くもなりまさるかな

（巻第十七雑二１３２５）

と、出家を決意しているので、中宮の父が死去した可能性もあり、春の歌４７は、父の喪に服して里居中の中宮の心情なのかもしれない。

６『女すすみ』〈二十二首〉

▼巻第七神祇４７８

登花殿の女御に忍びて物申して出でける暁、温明殿のわたりを過ぐとて、内侍所のおぼしめすらんことも恐ろしくて　女すすみの左大将

神も見よかかる嘆きに結びける契りは今日の我が心かは

▼巻第十一恋一８１６

登花殿の女御、石山にこもれりと聞きて、忍びて尋ねまうづとてよみ侍りける　女すすみの左大将

これもまたいかなる道の初めとて端山繁山なほまどふらん

▼巻第十八雑三１３４９

真野の浦にこもりて侍りけるころ、登花殿の女御、草子書きてと申して侍りけるに　女すすみの左大将

あくがるるみるめなぎさの浜千鳥跡書きとめむかたもおぼえず

▼巻第十八雑三１３５４

娘の女御、左大将に名立ちて様変へて侍りけるに、先帝かくれさせ給ひて後、登花殿の女御に住みわたると聞きて、大将のもとに遣はしける　女すすみの内大臣

しほたるる海人の袖のみ朽ち果てていかなる浦にみるめ生ふらん

４７８・８１６・１３４９から、登花殿女御と左大将との深い関係が窺える。二人は、登花殿女御の石山参籠の折のみならず、宮中でも忍び逢っていたのだから、「后妃の密通」と呼べる関係である。真野の浦に籠もっていた左大将に登花殿女御が「草子書きて」と言って寄越しているので、女御は左大将を疎んじてはおらず、彼との密通は女御の意に反したものではなかったのだろう。

小木氏は、「女すすみ」という題号は「女進み」であり、「女進み」とは「女の心進み」、つまり、「女がアクティブである恋物語」（同氏著前掲書九〇九頁）を意味すると解釈され、登花殿女御と左大将との密通は、宮中でも石山でも女御の方が左大将を招き入れ、女御側の積極的な働きかけで成立した恋であるとされた。

また、『風葉和歌集』には、この登花殿女御と彼女の配偶者であった先帝とのやり取りも収められており、次の四首の歌に

よって、両者の仲をも推し量ることができる。

御心地限りにおぼえさせ給ひけるに、いとせちにおぼされける女御にのたまはせける　女すすみの先帝御歌

はかなくも契りけるかな浅茅原葉末の露の常ならぬ世に

御返し　　登華殿の女御

吹き乱る浅茅が露の風のまにまづ消え果つる我が身ともがな

（巻第九哀傷６２８・６２９）

心地例ならず侍りけるに、みかど、行末遠く契らせ給ひけるに　女すすみの登花殿の女御

この世をば今いくかともしら雪の消えなんのちの身を頼めとや

（巻第十六雑一１２５０）

心地例ならず侍りけるに、みかどに聞こえたてまつり侍りける　女すすみの登花殿の女御

忘れずは夕べの雲によそへてもむなしき空をそれと眺めよ

（巻第十七雑二１２９４）

先帝にとって登花殿女御は「いとせちにおぼされける」寵妃で、病床からその帝に「忘れずは」と語りかける彼女も、帝を慕っていたようである。にもかかわらず、左大将にも心惹かれて逢瀬を重ねる登花殿女御の有様は、小木氏の指摘されたように（同氏著前掲書）『源氏物語』の朧月夜尚侍に似通っている。ただし、朧月夜尚侍は最終的には光源氏ではなく帝を選び、退位した朱雀院に従って行くのだが、『女すすみ』では先帝が崩御してしまい、後に、登花殿女御は左大将と公然とした仲になっているらしい。その経緯を記した１３５４の詞書によると、内大臣の娘である女御も左大将と忍び逢っており、その事実が発覚したために内大臣の女御は落飾せざるを得なかったようである。左大将が真野の浦に籠もったのも、この密通の露見が原因であろうか。そうであるならば、朧月夜尚侍的な役割を付与されているのは、むしろ内大臣の女御の方で、登花殿女御は自身の密通を隠し通す藤壺的な存在であったか。

小木氏は、左大将が真野の浦に籠もったのは、登花殿女御・内大臣の女御との密通の露見ゆえに蟄居したためかとされる（同氏著前掲書）が、登花殿女御との不義も世に知られたのだとすれば、もう一人の密通相手である内大臣の女御が出家しているのに、登花殿女御がそうしなかったというのには些か疑問が残る。

内大臣の女御と登花殿女御は左大将と密通しており、内大臣の女御はその事実が世に知られてしまい出家。左大将はほとぼりがさめるまで真野の浦に蟄居。一方、登花殿女御は秘密を隠し通し、先帝の崩御後に左大将の妻のような立場になった、という筋立てだったのではあるまいか。

帝の寵妃でありながら左大将とも密かに情を交わし、秘密を守り抜いて、帝の崩御後、おそらくは何食わぬ顔をして左大将を招じ入れる。同じように左大将と密通し、その発覚によって出家に追い込まれた内大臣の女御に比べると、登花殿女御は強かに世を渡る術を知る女性だったようである。

7『かやが下折れ』〈十五首〉

▼巻第六冬４３７・４３８

心地の例ならず侍りけるころ、関白忍びてまで来て、雪の積もりたる暁の空をいざなひて見せ侍りける

かやが下折れの宣耀殿の女御

憂きことは身にのみ積もる白雪の消え返りてもふるぞ悲しき

返し

たれもみな消え残るべき身ならねば降り添ふ雪を何かいとはむ

４３７の詞書に宣耀殿女御が「心地の例ならず侍りける」とあるのは、懐妊中であろうか。ならば、女御の「辛い事は自分の身にばかり降り積もる」という述懐は、関白との密通のみならず、その結果、不義の子を身籠もってしまったことをも嘆いているのかもしれない。

また、関白には、妻らしき女性に先立たれた際に、「宣耀殿の少納言」と呼ばれる女性との贈答歌がある。

関白、中宮の母に後れて嘆き侍りけるころ、梅の花に付けてさし置かせける

かやが下折れの宣耀殿の少納言

あはれとて見る人からやしをるらん花はもの憂き色ならねども

返し

契りあれや物思ふ宿のながめにて花は涙にぬるる顔なる

（巻第九哀傷６０５・６０６）

この少納言は宣耀殿女御に仕える女房であろうか。文を結び付けた梅の枝を「さし置かせ」ているので、表立っての弔問ではないと思われる。女御と関白との密通にも何らかの関わりがある人物なのかもしれないが、中宮の母（関白の正妻か）に先立たれた関白にわざわざ歌を贈っているほどなので、単なる手引き役にしては関白との関係が深そうである。表立っての弔問を憚っているようなので、関白の縁者などではなく、宣耀殿女御に近付くために関白が籠絡した女御付きの女房で、彼の通い所の一つででもあったのだろうか。

8『玉藻に遊ぶ権大納言』〈十三首〉

▼巻第十四恋四１０２２

内に参らんとし侍りける後の逢ふ瀬をさまざま契りて、「巌に生ふるまつほどは」と申しける人の返しに

同じ東宮の母女御

契りきと我は忘れず思ふとも巌に生ふるまつ人もあらじ

東宮の母である女御は、入内以前に男性と恋仲になっていた。すでに男性を通わせていたにもかかわらず、参内が取り決めら

れたのだから、二人の間柄は、女御の親、もしくは後見人にも隠された密やかなものであったのだろう。

入内が決まった女御に対して、相手の男性は、入内以降も忍び逢うことを誓うのだが、彼女の方は男性の言葉を信じ切ってはいなかったようだ。実際に入内した彼女のもとへこの男性が忍んで来たのかどうかは不明だが、最終的に彼女は東宮を出産し、将来の国母という地位を約束される。

『無名草子』は、『玉藻に遊ぶ権大納言』の登場人物達を批判する文脈の中でこの女御を、

また、『巌に生ふるまつ人もあらじ』と言へる女御こそ、さる方にてかからぬ…。（新編日本古典文学全集二四〇頁）

と評しており、彼女に好感を抱いていたようである。

女御の相手の男性については、物語の主人公である関白（権大納言）に、

後の逢ふ瀬を頼め侍りける女の、ほかざまになりにける夜遣はしける　玉藻に遊ぶ関白

今日までも長らへましや忘れじといひしにかかる命ならずは　（巻第十三恋三９６４）

という詠歌があり、松尾聰氏は、「後の逢ふ瀬を頼め侍りける女」が東宮の母女御であった可能性を指摘されている（『平安時代物語の研究』東寶書房、一九五五年）。

だが、またの逢瀬を期待させておきながら他の男性と結ばれてしまった９６４の女性と、入内後にも逢瀬を持とうと約束する男性に「私が貴方を忘れずに待ち続けても…」と懐疑的な言葉を投げかける女御とを、同一人物であるとするのには些か疑問が残る。

しかも、１０２２の詞書によると、「『巌に生ふるまつほどは』と申しける人」は、女御の入内以降の逢瀬、つまり、「ほかざまになりにける」後の逢瀬を約している。これに対して、９６４の詞書が意味するところは、「関白は、またの逢瀬を期待させた女性が他の男性と結婚する夜に、自分との約束を違えたことへの恨み言を詠んだ歌を遣わした」であり、他の男性と結婚すること自体が関白との約束に反することだと責めているのだから、女御が入内―他の男性と結婚―した後にも逢瀬を持とうと約束する１０２２の男性と、関白とは別人であるとするのが妥当ではあるまいか。

９『たゆみなき』〈三首〉

▼巻第六冬３６４

神無月のついたちに、「たぐひなく憂き別れ路の袖の上にいとど降り添ふ初時雨かな」といへる人への返し　たゆみなきの藤壺の女御

たぐひなく物思ふ人の袖の上に今朝を分きける時雨とも見ず

後朝のやり取りであろうか。「今朝を分きける時雨とも見ず」と言うのだから、藤壺女御は、神無月の一日よりも前から物思いの涙で袖を濡らしていたのだろう。おそらく、この日より前から歌を交わした相手との逢瀬を持っていたと思われる。

藤壺女御にとって、「たぐひなく憂き別れ路の…」と詠んだ人物との関わりが、物思いの種となるような類のものであったのならば、おそらく帝以外の男性と密通していたのだと考えられる。

ところで、この３６４番歌は巻第六の巻頭歌であり、この歌の直前に位置する巻第五の巻軸歌は、『たゆみなき』において九月末日に詠まれたものである。

九月つごもり、つれなかりける女のもとにまかりてよめる　たゆみなきの中将

出でてみよさこそつらさは尽きずともこよひに限る秋の気色を　（巻第五秋下３６３）

このように『風葉和歌集』が、秋部巻末には秋の終わりである九月末日の歌、冬部巻頭には冬の始まりである十月一日の歌を配置するのは、勅撰集の通例通りの配列だと米田明美氏が指摘されている（『「風葉和歌集」の構造に関する研究』笠間書院、一九九六年）。『風葉和歌集』の撰者が勅撰集の配列を踏襲するために多数の物語の中から九月末日の歌と十月一日の歌を選び出した際、意図的に二首を配列したと仮定し、３６３・３６４は『たゆみなき』の中の一連の出来事で、藤壺女御の相手は中将なのだとの想定もできるが、詳細は不明。撰者が選んだ歌のどちらもが偶然にも『たゆみなき』の作中歌であったに過ぎず、３６３番歌と３６４番歌とは別々の場面で詠まれたものとも考えられる。

なお、中将は「山里なりける女」にも言い寄っており、小木氏は、この女性も「つれなかりける女」も藤壺女御を指すとされている（同氏著前掲書）。

秋のころ、山里なりける女のもとにまかりて、ただに帰りてよめる　たゆみなきの中将

いたづらに秋の野山の露分けてさも干しわぶる袖の上かな　（巻第十五恋五１１０７）

３６４番歌とその詞書に記された歌にも共通の「袖の上」という語がここでも用いられているので、あるいは、藤壺女御の密通相手は中将であったか。

10『千々に砕くる』〈八首〉

▼巻第十一恋一８３７・８３８

忍びたる所にて、情なからぬさまにもてなして出づとて　千々に砕くる左大臣

世の常の別れと人や思ふらむこはたぐひなき袖の涙を　返し　按察の御息所

たぐひなき袖の涙を懸けてだに見し夜の夢と人に語るな

按察の御息所が左大臣に「自分との逢瀬を他言しないで欲しい」と、わざわざ念押しするのは、彼女が左大臣を信頼していないからなのだろうか。権中納言に忍び入られた『我身にたどる姫君』の後涼殿女御は、二人の関係を権中納言が、その妹で、自分と同じく三条帝の女御である麗景殿女御に打ち明けるのではないかと危惧しており、按察の御息所も左大臣に秘密保持の意志があるのかどうか疑っていたのだろう。

一方の左大臣は、忍んで行った按察の御息所のもとから「情けなからぬさまにもてなして」立ち去ったというのだから、実際には御息所にさほど心惹かれてはいなかったのかもしれない。

按察の御息所の詠歌は『風葉和歌集』にもう一首、愁いに沈む心情を吐露したものが収録されているが、彼女の物思いがどのような事情によるのかは詞書に記されておらず、左大将との関わりが原因なのかどうかは不明。

八月ばかり、箏のことに忍びて掻き鳴らし侍りける
千々に砕くる按察の御息所
月影もながむるからの秋の空心尽くしの風ぞ身にしむ
（巻第四秋上２７７）

なお、左大臣には按察の御息所の他にも想う女性がいたが、その女性は左大臣の前から姿を消し、やがて立后しているので、『千々に砕くる』には「しのびね型」らしきエピソードも含まれていたようだ。

恋ひわぶる心は闇に暗すとも雲居の月をよそにながめよ
これは千々に砕くる左大臣、もの申しける女のきさいに立ち給ひにけるを知らで嘆きけるころの夢に、石山よりとて、巻数の札に書き付けたりけるとなん。
（巻第七釈教４８３）

いとせちに思ひける女に、ただしばし添ひて侍りけるが、行方知らずなりにければ　千々に砕くる左大臣
夢とのみ思ひなせども見しままの面影にこそ忘れわびぬれ
（巻第十四恋四１００６）

『風葉和歌集』は登場人物名を最終的な肩書きで記すので、后立ちした女性と按察の御息所とは別人であろう。この物語の主人公である左大臣の主たる恋の相手は、４８３の詞書に見える后となった女性で、按察の御息所との忍び逢いは、戯れの恋に過ぎなかったか。

11『萩に宿借る』〈八首〉

▼巻第十二恋二８８７・８８８

忍びたる女のもとより出づる暁よみ侍りける
萩に宿借る大将
思ひ出でよ夕べの空の雲にだに命に換へしあけぐれの夢

これを聞きて心のうちに　　院の女御
長らへて憂き世に月のすまばこそ思ひも出でめあけぐれの空

「辛いこの世に生き長らえることができたなら、今日の明け暗れの空を思い出しもするだろうけれど」と慨嘆する院の女御は、大将との忍び逢いを「死ぬほど辛い」と思い詰めているようだ。８８７の詞書で院の女御は「忍びたる女」と呼ばれており、二人の間柄は世を憚からねばならない類のものであったのだろう。しかも、大将が彼女との逢瀬を「命に換へしあけぐれの夢」と譬えるのは、前述の『逢ふにかふる』と同様に、「帝の御妻をあやまつ」物語である『伊勢物語』六十五段の昔男が詠んだ歌を踏まえた表現であろうから、これは院の女御の入内以降の出来事だと思われる。

同じように密通する男女の暁の別れを描いた『源氏物語』若菜下巻でも、女三の宮と柏木との密通場面で「あけぐれ」の歌が交わされている。

（柏木）おきてゆく空も知られぬあけぐれにいづくの露のかゝる袖なり
（女三の宮）あけぐれの空にうき身は消えななん夢なりけりと見てもやむべく
（新日本典文学大系③二六六頁）

院の女御の心中に浮かんだ「あけぐれの空」という言葉は、女三の宮の歌にも見えており、女御と大将との密通は、女三の宮と柏木との関係を踏まえて描かれていたのかもしれない。

ただし、大将への返歌を口にこそ出さなかったものの、院の女御の胸の内は大将と忍び逢った日の「あけぐれの空」を、「思い出したくない」ではなく、「生き長らえることが出来たら思い出しもするだろう」なので、大将との仲が彼女にとって不本意なものであったのかどうかは、判断し難い。

12『袋かけ』〈二首〉

▼巻第十一恋一７９５

忍びたる男の返事に　　袋かけの女御
せきかぬる涙の川と聞くからに我が身さへこそ浮きて流るれ

『袋かけ』の歌はもう一首、『風葉和歌集』に入集している。

忍びたる女のもとにて、さまざま恨みて　　袋かけの大将
つれなきを恨むる葛の下葉こそ涙の露の置き所なれ
（巻第十二恋二８４４）

この二首の和歌をもとに女御と大将との密通が想定されている(小木氏著前掲書)。大将は「忍びたる女」のつれなさを恨んでいるようなので、「貴方と同じように私も涙にくれています」

と「忍びたる男」に応える女御の相手とは異なるようにも思えるが、断定はできない。

何れにせよ、相手の男性とは「忍びたる」仲で、お互いに涙に眩れているというのだから、女御が密通していた可能性は高い。

13『御垣が原』〈四十三首〉

▼巻第九哀傷６５９

皇后宮にいささか近づき参りて、さいひしぞかしとおぼし出でよと、御耳に聞こえおくとて

御垣が原の宮の大将

今はただそれかとばかりたなびかむ夕べの雲の空をながめよ

▼巻第十四恋四１０４３

今はの際に、あはれなる歌ども書きて、皇后宮にたてまつらせ給へとて、一品の宮に聞こえさせ侍りける

御垣が原の宮の大将

涙川この世のほかに流れぬと袖より漏らせ水茎の跡

▼巻第十五恋五１０９７

野分の紛れに皇后宮を見たてまつりて後、心地限りになりにければ、中務内侍に遣はしける

御垣が原の宮の大将

身にしみて思ひ出づるも悲しきにその秋風の露と消えなで

詞書に「いささか近づき参りて」とあるので、６５９が詠まれた場面では皇后宮と宮の大将との密通は行われなかっただろう。

１０９７番歌詞書の「野分の紛れ」とは、夕霧が紫の上を垣間見た『源氏物語』野分巻のような状況であったか。それとも、皇后宮と宮の大将とが「野分の紛れ」に密通したことを意味するのだろうか。何れにせよ、中務内侍は二人の間の事情を知る仲介役であったようだ。

宮の大将の父は親王であろうから、１０４３の詞書に登場する一品の宮は、大将のおばに当たる人物か(小木氏著前掲書)。皇后宮への文を託されるのだから、皇后宮とも近しい間柄だと考えられる。あるいは、入内前の皇后宮は、近親者である一品の宮と同じ邸内で育ち、そこへ一品の宮を訪ねて来た大将が、何らかの切っ掛け(「野分の紛れ」?)で皇后宮に恋慕の情を抱くようになったのかもしれない。

その宮の大将の意に反して皇后宮は入内したのか。もしくは、宮の大将が皇后宮に惹かれるようになったのは、入内後の彼女が一品の宮邸に里下がりしていた時期の出来事かもしれない。

また、『御垣が原』では中宮も右大将に思いを寄せられるのだが、次の二首で明らかなように、それは右大将の片恋で終わっている。

妹の中宮の御事を思ひて、「悲しきはたれ故燃えし煙とも知られぬ山にたなびきやせむ」、この恨みをだにいかではるけてしがなと右大将申し侍りけるに

御垣が原の内大臣

消えぬべきこれは思ひの煙ともかひなき空にほのめかせとや　（巻第十一恋一８１１）

内大臣物思はしげなる手習ひを見つけて、思ひ絶えにし中宮の御ことを思ひて、そばに書き付け侍りける

御垣が原の右大将

思ひ知れこれだにありな見ずもあらず見もせぬ恋の下に燃えしを　（巻第十三恋三９５８）

この中宮は、皇后宮が宮中から退出する際に、別れを惜しむ歌を贈っており、二人の女性は親密な間柄だったようである。

皇后宮、内に入らせ給ひて、出でさせ給ひけるに

同じ中宮

もろともに影を並べぬ雲の上はすむ空もなし秋の夜の月　（巻第四秋上２７９）

『御垣が原』には『風葉和歌集』で確認できるだけでも当代の帝以外に数人の上皇が登場しており、何世代かの御代に亘る物語であったらしい。２７９番歌詠者の中宮は帝の妃。その帝は、皇后宮に恋い焦がれた宮の大将の死後、大将の正妻らしき女二の宮と

宮の大将身まかりて後、みかどの忍びてとぶらひのたまはせたりける御返事に

御垣が原の女二のみこ

つれなさの命は憂きに消えやらであればこの世の嘆き添ひつつ　（巻第十三恋三９６１）

という密かなやり取りがあるので、中宮・皇后宮・帝・宮の大将は同時代に活躍していたものと推測される。

ならば、中宮と皇后宮とは、同じ帝の后妃であった可能性もある。『我身にたどる姫君』の女帝と藤壺皇后とは、共に三条院の后妃でありながら、対立することなく、お互いに深い親愛の情で結ばれていた。『御垣が原』の中宮と皇后宮も、それに類似の関係だったのかもしれない。

14『みかはに咲ける』〈十二首（物十五首）〉

▼巻第十二恋二９３２

ただ一度逢ひて侍りける女に

みかはに咲ける前関白

今日も暮れ明日も過ぎなばいかがせん時のまをだに耐へぬ心に

↓『物語二百番歌合』後百番歌合　三十六番２７２

右　承香殿の女御、桃園に渡りて物忌し給ふ所に、思はぬほかに、その人とも知らず夢の心地して立ち出でて、朝に

権中納言

今日も暮れ明日も過ぎなばいかがせむ時のまをだに耐へぬ心に

『物語二百番歌合』の詞書により、権中納言（『みかはに咲ける』の登場人物名は、便宜上、『物語二百番歌合』に記された作者名による）が「ただ一度逢ひて侍りける女」は承香殿女御であったことが知られる。相手の女性が女御という身分であると知らないがために生じた事態のようであり、桃園での一件以降、承香殿女御は、権中納言を寄せ付けず、自身の素性も判明しないように気を配ったものと思われる。

桃園の女性を承香殿女御と知らずにいたためか、権中納言は、人違えによって太皇太后宮の御匣殿と逢瀬を持つ。

前関白いとせちにいひ寄りて、人違へしたるさまに見え侍りければ　みかはに咲けるの女院の御匣

なげきこり道まどひける山人の行くてにかかる物を思ふよ

（巻第十四恋四１０２６）

→『物語二百番歌合』後百番歌合　三十八番２７６

右　みかはにさける所たがへに、権中納言、あながちに消息し寄りて、あらぬ人と見あらはしたる気色見え侍りければ　太皇太后宮の御匣殿

なげきこり道まどひける山人の行くてにかかるものを思ふよ

『風葉和歌集』『物語二百番歌合』に収録された他の歌から、『みかはに咲ける』には、この人違えを発端に、権中納言と太皇太后宮の御匣殿、そして三位中将に纏わる悲恋が描かれていたことが窺える。

右　御匣殿に通ひ初めて、帰りて朝に、まづかき乱る心のうちに、書き出づべき言の葉もおぼえざりければ　（引用者注：権中納言詠）

藻塩草いかに書かまし胸にたく恋よりほかにくゆる煙を

（『物語二百番歌合』後百番歌合　三十九番２７８）

女のもとより帰りたる人に代わりて、あしたに遣はしける　みかはに咲けるの関白

朝霜のおくれば暮るる冬の日も今日こそ長きものと知りぬれ

（巻第六冬３８８）

→『物語二百番歌合』後百番歌合　四十二番２８４

右　初めて帰りて朝に、御匣殿の御もとに、中納言に代わりて　三位中将

朝霜のおくれば暮るる冬の日も今日こそ長きものと知りぬれ

返し　女院の御匣

冬の日の暮るるも知らず消え返るあしたの霜に身をたぐへばや

（巻第六冬３８９）

右　御匣殿に通ふよしきこえて、きさいの宮、所あらはしせんと、わざとことごとしうおぼし急ぎしに、

逃れて後、かの君のもとに　　三位中将

涼みせし桂の里の川風も見ぬ夜の恋を冷ましやはせし

（『物語二百番歌合』後百番歌合　四十七番２９４）

右　御匣殿はかなくなりて後、正日に経仏など供養せさすとて、ひとりながめて　　三位中将

返さばや人をも身をも恨みつつ隔て果てつるなかの衣を

（『物語二百番歌合』後百番歌合　四十九番２９８）

右　御匣殿の法事に誦経せさすとて　　（引用者注：権中納言詠）

大空に響かむ鐘の音ごとに沈まむ底も浮かぶばかりぞ

（『物語二百番歌合』後百番歌合　五十番３００）

御匣殿が目当ての人物ではないと気付き困惑した権中納言は、後朝の文を三位中将（後の「関白」）に代筆してもらう。権中納言の身替わりとなった三位中将は、太皇太后宮に御匣殿との所顕しをさせられそうになり、逃れる。その後、御匣殿は死去。三位中将は、法要を営み、ひとり彼女の死を悼む。権中納言もまた、御匣殿のために仏事を執り行った。樋口芳麻呂氏は、権中納言が御匣殿を桃園で逢った女性―承香殿女御―と間違えて言い寄り、女御と権中納言との一度きりの邂逅は、この一連の出来事の導入としての役割を果たしていると解された（『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』ひたく書房、一九八二年）。

禁断の恋であるがゆえに承香殿女御は自分の身分を隠し通し、相手が誰なのかを知ることができなかった権中納言は、人違えによって不本意にも御匣殿と出会う。人違えから始まった権中納言と御匣殿との出会いは、三位中将をも巻き込んで、遂には御匣殿の死という悲劇的な結末を迎える。『みかはに咲ける』に描かれていた「后妃の密通」は、不幸な恋の連鎖の引き金となるものだったのかもしれない。そうした御匣殿の境遇に対して『無名草子』は、

御匣殿こそ、いみじくいとほしけれ。　　（新編日本古典文学全集二五三頁）

と、同情を示している。

なお、『物語二百番歌合』で「承香殿女御の中納言」と呼ばれる女房の名が、人物名を最終的な肩書きで記す『風葉和歌集』では「皇后宮の中納言」となっており、二度と権中納言を寄せ付けなかった承香殿女御は、最終的には皇后となって栄華を極めたようである。

15『闇のうつつ』〈三首〉

▼巻第九哀傷６５７

病して弱くなりにける時、忍びて男に申し侍りける

闇の現の大納言の更衣

頼めてもこの世はよしや渡り川後の憂き瀬を問はむばかりぞ

▼巻第九哀傷６９４

闇の現の大納言の更衣の、墓の草の茂く侍りけるに、左大将の夢に見え侍りける歌

恨めしや行き来の道となし果てて茂る草葉は払ふ世もなし

６９４番歌と詞書によると、大納言の更衣は、左大将の夢枕に立って自分を弔わないことに対する恨み言を述べているので、６５７の詞書にある、更衣が辞世めいた歌を詠みかけた相手も、左大将と解釈できよう。６５７の歌を「忍びて男に申し」たというのだから、これは大納言の更衣が後宮の一員であった期間の出来事だと考えられる。

死期を悟った際には左大将に来世の誓いを求め、死後も彼に未練を残す大納言の更衣は、能動的に左大将と密通していたのだろう。帝の後宮に侍する身でありながらも、更衣の心を占めていたのは左大将で、にもかかわらず、左大将の方は他に心を分ける女性がいたのか、更衣の墓を訪れなかったようだ。

三

以上の例を見てみると、「しのびね型」の物語の可能性がある『うつせみ知らぬ』『小車』『親子の中』、密通が実際に行われたのか不明な『逢ふにかふる』『御垣が原』を除くと、「后妃の密通」らしき事例が十作品十一例ある。その十一例の中には、密通相手との関係を嘆く后妃が多いようではあるが、密通が后妃にとっても不本意ではなく、彼女達にも積極的な姿勢が窺えるものが、二例ある。

帝の寵愛を受けながらも左大将と密通し、帝が崩御した後には彼と公然とした仲になった、『女すすみ』の登花殿女御。死してなお左大将に執着する、『闇のうつつ』の大納言の更衣。それに、実際に入内後に密通が行われたことを裏付ける資料はないのだが、「参内した後も貴方を忘れない」と関白に語る、『玉藻に遊ぶ権大納言』の東宮の母女御を加えると、三例となり、これは、散逸物語に描かれた后妃密通の事例として確認したものの四分の一を超える割合を占めている。

確かに「帝の御妻をあやまつ」ことは重大な禁忌であり、冒頭でも述べたように、中世王朝物語に描かれた「后妃の密通」の大部分は悲劇的なものである。しかし、この「后妃の密通」という題材は、あまりにも多くの物語に繰り返し用いられたため、物語の作り手や享受者達にしてみれば、禁忌が侵犯されることに対する衝撃の度合いも弱まっていたと思われ、密通する全ての后妃とその相手とが罪の意識におののき苛まれているという描き方をされたのでは、ワンパターンで面白味に欠ける。当然の成り行きとして、「后妃の密通」にも様々なバリエーションが要求された。その傾向が如実に現れたのが、『我身にたどる姫君』に描かれる三者三様の「后妃の密通」ではないだろうか。

『我身にたどる姫君』は、「后妃の密通」が多出する作品の筆頭に挙げられる中世王朝物語である。帝の寵妃でありながら関白との間に不義の子我身姫をもうけ、その関白に惹かれなが

らも心を許していないかのように振る舞い続け、最期になってようやく彼に真意を明かした水尾院の皇后宮。三条帝の寵愛をほぼ独占していたにもかかわらず、心ならずも宮の中将に忍び入られ、祖母である水尾院の皇后宮と同様に不義の子を産み、挙げ句には、皇女と偽って育てていたその娘を実父である宮の中将に盗み出され、運命に翻弄され続けた後涼殿中宮。そして、東宮女御であった頃から殿の中将と密かに情を交わし、不義の子も秘密裏に出産して難局を切り抜け、後宮における自分の地位もそれなりに確立して、最終的には安逸な生活を手に入れた麗景殿女御。

その中でも、奔放で、一見特異な性格付けをなされているかに見える麗景殿女御であるが、『風葉和歌集』から窺い知ることができる三人の「密通する后妃」像は、麗景殿女御の如き女性が、散逸してしまった中古・中世の王朝物語にも登場していた可能性を示している（注2）。

注

（1）『風葉和歌集』『物語二百番歌合』の引用は、岩波文庫『王朝物語秀歌選 上・下』による。

（2）『風葉和歌集』よりも後に成立したと推定される『風に紅葉』では、主人公である大将が梅壺女御・承香殿女御と密かに逢う。どちらの女御も、里邸で自ら大将を引き入れ、帝の要請により宮中へ戻った折には、大将との逢瀬を持てないことを嘆く。梅壺女御が中宮となった際には、彼女の従兄弟でもある大将（当時は「内大臣」）が立后の祝賀に尽力し、それを草子地は「中宮が内大臣と密通したことは、無駄ではなかったのだ」と評する。大将と二人の后妃との密通は彼女達の配偶者である帝が退位した後も続き、里居中の承香殿女御の邸を訪れた大将が、その西の対に住む彼女の異母妹を見出して通い始めたところ、その女君は、事態を察知した女御に邸を追い出され、やがて死去する、という悲劇まで派生している。『風に紅葉』にとって后妃との密通は、主人公の華麗な女性遍歴を彩る一つのエピソードに過ぎず、それが「后妃の密通」であることによって生じる悲嘆や悲劇は存在しない。『風に紅葉』において決定的な不幸を生じさせる密通といえば、大将が、正妻である一品の宮のもとに、自分の甥で男色の相手でもある中将を導いたことである。不本意にも夫の手によって密通させられて不義の子を身籠もった一品の宮は出産後に死去しており、衝撃的かつ独創的なこの密通と比べれば、数多の物語に頻出して使い古された観のある「后妃の密通」のインパクトが弱まってしまうのは致し方あるまい。あるいは、これは『風に紅葉』だけに見られる傾向ではなく、『風葉和歌集』にも、『風に紅葉』と同様に深刻さに欠ける「后妃の密通」を描いた物語が収録されているのかもしれないが、残念ながら現存する資料からはその断片すら掴み取ることができない。

（みやざき　ゆうこ・九州大学大学院博士後期課程）